

# プレゼンテーション 1

## 基調講演

「世界のLPG情勢」  
ポータン&パートナーズ社（英国）  
LPGコンサルティング部長  
コーリン・シェリー氏



プレゼンテーションに入る前に、このセミナーの2週間前に亡くなったLPガス事業のパイオニアであるルネ・ブーデ氏の業績と「これまで40年間LPガス事業に携わってきたが、その中で一番、自分の宝としてきたのは、このLPガス産業の特別なコミュニティ感である。それ以外の世界は、ますます巨大化し、そして複雑で訳が分からなくなっていく中で、この業界は特別だった」という同氏の言葉を紹介し、20秒の黙とうの提案があった。黙とう後をプレゼンテーションに入った。

○まず、皆が関心を抱いていることを網羅していきたい。最初に、これが一番の鍵となる部分だと思うが、なぜ予測を立てて間違ったりするのかということ。それから、供給の構図全体、さらに価格について、それから需要、そしてこれから先の取引の行方、それから SHIPPING について、最後に少し結論を述べて、プレゼンテーションを終えたい。

○2年前にもここで話をし、そしてスピーカーの方々の話を伺い、私自身もプレゼンテーションした。その時も、やはり先を見ながらの話でしたが、その当時、市場の状況が今日のようになるとは、誰も予想していなかったのではないだろうか。2008年の第1四半期がこのようにスタートするとは思わなかったと思う。このプレゼンテーションを作ったときには、原油価格1バレル当たり100ドル近くになっており、今ではもう100ドルを超えていると思う。

また、昔の私たちのかかわった7年前の研究報告のレポートを読むと、その中で、原油価格の予測をすることになっていた。そのときの予測では、1バレル当たり20ドル。また、恐らく皆さんの中でもご存じだと思うが、LNGへの契約として2001年、2002年に結ばれたものがいろいろあり、そのうちの一つは、特に原油価格が上がっても1バレル当たり25ドルと予測されていた。しかし、そこから随分遠くまで来てしまい、そのようなレベルに戻ることはないのではないかと思う。原油価格の高騰、あるいはこの高い価格はそのまま続くと思う。100か80か150ドルか、どうなるにせよ、原油価格が低かった時代はもう終わった。そしてそれは、LPガスの価値、価格がどのように付けられ、そしてどうやって

売られるかにも大きく影響してくる。

○ここ数年前と変わった二つ目の点として、新しいL Pガスの供給プロジェクトの話がたくさん出てきて、それによってL Pガスが世界市場に出回ってくるだろうと言われていた。しかし残念ながら、それはまだそれほど実現されておらず、L Pガス市場はタイトな状況です。サウジアラムコはスポットカーゴでは一つだけしか売っていないのではなかろうか。これまでは400万トンをスポット市場で販売していたが、今では一つだけとなっている。一体、L Pガスの供給は、また、供給ボリュームとして私たちが期待していたものはどこに行ってしまったのだろうか。L Pガス市場がタイトである理由は、この供給がまだ届いていないからで、プロジェクトが遅れているというのが大きな要素となっている。

これに関連して、私たちはL Pガスの価格メカニズムも変わるだろうと期待していた。いわゆるC P、一部では、古い時代の価格のアナクロニズムであるとか、C Pの重要性がなくなる、あるいは完全になくなってしまうのではないかとまで言われていた。しかし、このC Pは今でも権威があり、またL Pガスの価格メカニズムとして最も重要なものとして、厳然として残り、私たちのビジネスの一部となっている。

私は東京に到着し、サウジアラムコの代表の方々と一緒にテクニカルツアーでバスに乗ったが、その時に、「C Pは今、どうなっているか」と私が聞くと、「間もなく発表されるよ」という話だった。鹿島のL P Gターミナルに到着するころにはC Pが発表され、そしてメッセージが私のところに届いた。そのような形で今、私たちのビジネスは展開している。待って、待って、ようやくC Pが発表されるという形で5年前も10年前も20年前もやっていた。L Pガスの価格構造は全くそこから変わっておらず、新しい供給はまだ市場に届いていない。

○三つ目に、 SHIPPINGの市場も非常に悪い形で影響を受けている。新しい供給があるということを中心に新造船が発注され、2007年に使われていたフリートと、それから新造船、もちろん今は廃船になるものを横に置いておいて考えてみると、40%ほどフリートの全体像は増えるだろうと言われていた。間もなく新しい供給を基礎として発注された新造船が届くというところだが、肝心のL Pガスの供給の方は滞っている一方で、SHIPPINGについては供給過多となっている。取引市場全体を見まわしても、2年前に私たちが想像していたものとは全く違っている。先程言ったように世の中は思ったとおりに進まないことが多いが、とにかく何とか水晶玉をのぞき込んで、L Pガスの世界がこれから先、数年間どう展開していくかを少し予測してみたい。

○既に言ったように、プロジェクトは遅延しており、L Pガスの供給全体、グローバルな供給の状況が影響を受けている。建設業界が、今は大きな圧力を受けている。というのも、プロジェクトが石油ガス業界でどんどん増えているから。2年前にラスラファンを訪れた

ことがあったが、非常に大きな開発プロジェクトとなっている。その広大なスペースを眺めると、誰かが、「そこに製油所ができるんだ、そこにLPガスのプラントができるんだ、また、LNGのプラントもここにできる」と話してくれた。どこを見ても本当に広大なスペースで、その設備を造るために必要な建設は、2012年までにできると言われている。ラスラファン一つを取ってもそれだけのことがあるように、同じようなプロジェクトが、ほかのところでも行われており、石油ガスプロジェクトは他にも数々ある。技術的なケイパビリティ、それから建設業界の人材にも大きな圧力となっている。また、こうした建設コストがこの5年間で急に跳ね上がり、業界全体にかかる圧力によって、ますますプロジェクトの操業開始は遅れている状況です。そしてこういったことは、新しいLPガス供給、本来であれば、今年から供給開始とされていたものに影響を及ぼしている。

○ここで、二つの国をハイライトしたい。まず一つはサウジアラビア。常にここが一番重要な供給源で、LPガスの要として存在している国です。今でもやはり不確実な要素がいろいろあって、今、サウジアラビアで二つのことが起こっているといえる。

まず、マスターガスシステムが拡大している。また、新しい石油化学プラントが造られており、これらが柔軟性に富んだプラントであって、恐らくLPガスを原料として使うのではないかとされている。サウジアラビアでの主要な問題は、ではどのようにバランスを取っていくかです。供給が増えて、より大きくなるのか、それとも需要の伸びの方が高まっていくのか。もし前者であれば、恐らく輸出が増え、しかし後者であれば、輸出は減っていくのではないかと予想できる。

○二つ目の注目国はナイジェリア。後ほどもう少し触れたいが、ここには中東地域と同様に新しいガス関連のプロジェクトが数々ある。これは議論をされているもの、建設中のもの、これから建設が始まるものなどいろいろあるが、ここでの原動力となっているのは、これまでフレアとして使われてしまったガス、燃やされてしまったガスである。石油ガス価格が今のようなレベルになっているので、燃やしてしまうのでは資源の無駄になってしまう。それ故、いろいろなプロジェクトを立ち上げて、そのガスもとらえて、そしてLNGあるいはその副産物としてのLPガスを作るというインセンティブがある。ただ、ナイジェリアの状況も非常に難しいものとなっている。なぜ供給がナイジェリアできちんとされないのか、予想どおり進んでいないのかについて、説明したい。

○供給側の状況をこれから一つ一つもう少し細かく見ていきたい。まずは中東地域から。四つの主要な産油ガス国があり、それぞれLPガスの供給を増やすと言われている。一つがサウジアラビア、二つ目がカタール、三つ目がアブダビ、四つ目がイラン。サウジアラビアの状況は、私が理解するところでは、まだ新しい供給増を待っているところで、非常に残念なことだが、ハウイアのプラントにおいて、昨年末にパイプライン上で爆発事故が

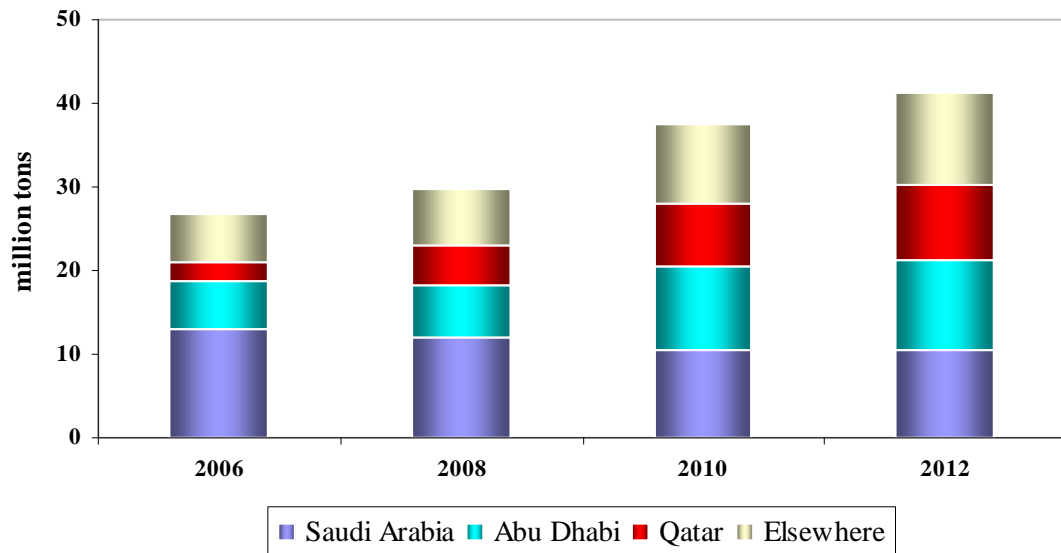
起こり、大きな遅延を生み出した。それによって、開業も大きく遅れることになりました。ハウイアは、L Pガス産出およそ年間 400 万トンと言われている。ハウイアがまだ開業していないことで、サウジアラムコはスポットのL Pガスを市場で売ることができないという状況になっている。二つ目が、クルサニヤ油田。6 カ月ほどの遅れで、6 月には操業を開始すると言われていた。しかし、請負業者といろいろな問題があつて、さらにこれが遅れ、2008 年末の操業開始となっている。クルサニヤは恐らく 200 万トンほどのL Pガスを年間に産出できると言われており、サウジアラビアでは 600 万トンほど年間でL Pガスの市場への供給が後れを取っている。こうしたプロジェクトが始まっていない、そして国内の石油化学プロジェクトが始まるのを待っているところで、供給側の遅れが出ているために、輸出のウインドーがまだ開かれないう状況となっている。

○二つ目の国カタールのことを皆さんはよく聞いていると思うが。供給増が予想されている。ノースフィールドの開発で増えると言われており、最近のプレゼンテーションなどでは、1200 万トンほどのL Pガスがこれから先 10 年ぐらいで利用可能になると言われている。一部うまくいっているものもあるが、やはり遅れが出ているところもある。うまくいっているように見えるのは、ドルフィン・ガスプロジェクトです。これは昨年の半ばにスタートし、ガスフローは2月にフルキャパに達した。私が理解するところでは今年の第2四半期後半には、L Pガスなどの副産物もフルキャパに達すると見られる。つまりは、ラスラファン以北で輸出源ができるということ。ただ、カタールでも遅延があり、これはLNGプロジェクトの遅れによる影響です。カタールガス、ラスガス、LNGトレイン、これは2008 年後半もしくは2009 年初めにならないと操業できないのではないかとされている。

○アブダビ、ここでもプロジェクトに遅れが出ている。OGD-3、それからAGD-2の操業開始は今年半ばと言われていたが、このプレゼンテーションを私が用意していたときには、2008 年末ではないかとされており、今はどうも2009 年初頭になるまで始まらないのではないかとされている。

○イランは可能性としてはたくさんあり、サウスパルスガス田に大きな可能性があるが、やはり大きな遅れが出ている。一番大きな問題は、統合がされていないということです。オフショアの建設と、それからオンショアのパイプライン、設備。それがきちんと一つにつながっていないので、オフショアでの生産が、開発されてもつながっていないということで、サウスパルスは1~2年ほど後れを取っている。これはオンショア側、陸上の設備のプロジェクトが完了していないためです。ということで、中東の状況は、プロジェクトの遅れとタイミングが一番の問題だといえる。今でもL Pガスはそこにあると、そしてやがては世界の市場に出てくるだろうと信じているが、ただ、思っていたよりもそれは遅い時期にならないと出てこないということ。

○輸出見通し、すなわち供給マイナス国内の需要は、2008年は2006年に比べて増えて、更に2010年、2012年の方が跳ね上がっている。二つの主な増加分は、アブダビ、カタールから。



○西アフリカの問題というのは、プロジェクトの遅れによるものではなく、むしろ、特定のプロジェクトで行われようとしていたものが、実施されない可能性が出てきているから。一部の能力増強は予想されているが、思っていたほどの規模ではない模様。1年前と比べて、その規模はそこまで大きくない

○NLNGに関しては、LNGの副産物としてLPGが作られており、六つ目のLNGのトレインが追加されるということから、LPガスも増えるという見通しを立てていたが、今年はいにくく、ガスの量は増えない見込み。そういうことから、既存の追加のLPGで売れるものは出てこない。

二つ目のエスクラボスの案件は50万~100万トンのLPガスの増加につながると見ていたが、そうはならないよう。当初、来期から始まると思っていたのはGTLプロジェクトによるもの。GTLという新しい技術の可能性について、いろいろご意見はあるでしょう。ただ、エスクラボスのこの案件については、基本的にGTLのプラントがまだ建設されていない。いつ建てるかについても、非常に不確実な状態で、プロジェクトは少なくとも2年またはそれ以上延期されている。

三つ目は、新しいLNGのトレインプロジェクト。こういったプロジェクトがナイジェリアで予定されていると思っていた。ただ、今やこういったプロジェクトをめぐる、疑問符が持ち上がっている。一時、急速に造られると思われていたのは、ブラスリバー、OKL

NGのプロジェクト。もしも実現すれば、300万～400万トンのLPGが2011年、2012年のころに供給されると見られていたが、今ではどちらも実現しないかもしれない。可能性としてはブラスリバーの方が高く、OK LNGの案件はかなり怪しくなっている。2011年、2012年をめどに立ち上がると見られていたが、今となっては1年遅れている、または全く実現しない可能性が出てきた。

日本はこういったプロジェクトの遅れや中止はあまり影響しないが、大西洋地域は影響を受ける。ナイジェリアは拡大していくだろう。ほかのプロジェクトの拡大も見込まれている。しかし、大きなプロジェクトの一部は実行されないかもしれず、そういったことから、ナイジェリアの供給拡大は、1年前に想定されたほど大きくないかもしれない。

○アフリカの輸出の見通しでは、主な供給国、輸出国はアルジェリア。比較的数値は横ばいとなっている。2012年には、ナイジェリアはアルジェリア並みになるかと思われていたが、伸びは期待されているものの、アルジェリア並みにはならないという見通しになっている。

○次は価格。新しい供給はまだ実現していないということから、今までの価格構造つまりCPが引き続き使われている。ここ1年の成り行きを見ると、CPが今でも支配的なことが証明され、今年も続いて、スポットLPガスがなかなか市場に出ていない。市場参加者であるならば、そしてLPガスが必要ならば、スポット市場に頼って安定供給は得られない。単に入手が難しいのみならず、非常に高くつく。われわれの試算によると、2007年の中東でのスポット価格は、トン当たりCPに比べて10～15ドル上回っている。

こういった理由から、CPベースでの契約をしている人々が2008年に入っても増えている。サウジアラビア、カタールが結んでいる2007年の契約、2008年の契約のCPベースの試算でもCPは今でも支配的で、今でも価格メカニズムの中心にある。

○この動きを強調することとして、2点申し上げたい。まず中国についてで、中国は思っていたほどLPガス市場において大きな影響を及ぼしていない。国内供給も増えており、自給自足ではないものの、輸入分が減ってきている。価格が高いということは一因となっているし、その支払い能力も要因となっている。中国の所得というのは、ヨーロッパや日本とは比べられない。それに加え、リファイナリーは国内市場に供給するLPガスを最大限生かそうとしている。理由はLPガスの価格メカニズムが、ほかの精製品と比べて自由なものになっているから。そういうことから需要面も減ってきており、こういった複数の理由から、代替の価格メカニズム、例えばFEIなどを採用する意欲が減ってきている。もちろん、FEIベースの取引も現在、実際に行われているが、2月のアジアでのスポット取引を見ると、大きな取引の8割はCPプラスベースで行われており、固定価格ではありません。3月渡しのもので、2月に契約が結ばれたものについては、CPが中心とな

っており、スポット市場については、今でもCPベースでLPGの価格が決まっている。特にアジアにおいてはそうなっている。

サウジアラムコの皆さんに是非申し上げたいのは、CPは決して完ぺきなものではないということ。もちろんサウジアラムコは、CPについての批判をかつて過去に受けているでしょうが、一番私が問題だと思っているのは、その不確実性。ロンドンを出たとき、3月のCPについて五つの意見を出し、見学会のバスに乗って鹿島に向かっていた際、CPが出るのを待っている間に憶測を立てて、サウジの皆さんに予想を伝えてみたが、外れた。これは本当に難しい。その実際の数字を把握していない限り、決してヘッジができないメカニズムだと思われる。これが問題なのではないかと思うが、実際使っているわけで、これからも使い続けるだろう。しかし、今後、将来的には、ヘッジを可能にするために、予測可能な要素があるメカニズムに移行すべきだと思う。

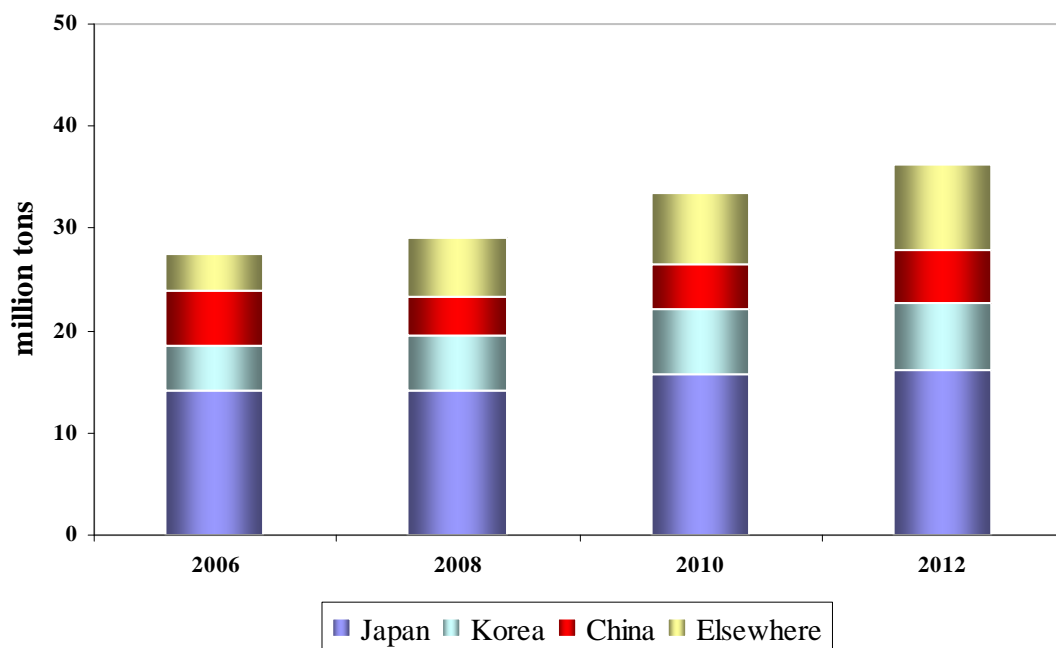
○需要面について私どもの見通しをお話したい。供給面についてはプロジェクトの遅れなどで見通しを若干変えたが、こちらについてはおおむね見通しは変わらない。ある意味、日本、韓国は成熟市場だと言え、中国に関する見解は、より悲観的になった。インドについては、まだ不確実だと見ているが、やはり補助金制度が鍵。インドの顧客というのは、LPガスのボンベ、シリンダーについて実際より低い価格を支払っている。価格が上がったら補助金制度が終わるのか、そうすると需要は左右されるのかなど、いろいろ疑問は残る。また、政府または民間会社は、この補助金制度がなくなったら、その分のコストを負担するのか、こういったことがいろいろ問題としてあるが、先行きは不透明。

一方で、リテールセクターについては、興味深いことに、インドネシア政府は灯油からLPガスへと移行しようとしている。というのも、LPガスの補助金が灯油よりも低いから。インドでは結構コストとなっているが、逆にインドネシアはLPガスに移行することによってメリットを享受できると思っている。将来的なインドネシアの輸入量についてはさまざまな議論が交わされているが、物流面が問題だと私は考えている。1億2000万人向けのリテールマーケットをとという話も出ているが、いかにLPガスを流通させるかが問題。まずターミナル基地、そして国内の流通網を構築する必要があり、両方とも現段階ではまだ初期的な段階にある。従って、インドネシアという市場は、非常に有望な市場ではあるが、成長は思っているほど早くないかもしれない。

○そして、ここ2年、目の当たりにしてきた動向として、LPガスの成長分野では石油化学分野が伸びている。ここ1年余りナフサ価格は、絶対的な意味のみならず、相対的な意味においても非常に高止まりしている。ナフサビジネスに関しては、ナフサ・クラック・スプレッドの話がしばしばされている。ナフサと原油の差です。これは本当にナフサ市場の需給の逼迫を示すもので、去年の上期に、クラックスプレッドは、トン当たり100ドルを上回り、そして下期には緩和した。しかし、2008年に入り再びタイトになってきた。そ

ういったことから、ナフサは絶対的にも相対的にも高くなっており、永遠に続くかどうか分からないが、現段階では少なくともそうになっている。それは石油化学会社にとって、インセンティブがあり、サウジアラムコのLPガスの価格を見てもメリットがあると見られている。去年は日本や韓国、台湾において、大幅にLPガスのクラッキングが行われ、それは2008年またその後も伸びていくと見られる。このクラッキングは、炉の構造を考えるとブタンが主に使われている。台湾の新しい炉では、プロパンのクラッキングが行われており、石油化学業界の需要は、主にアジアにおいてはブタンがメインとなる。

○スエズ以東の輸入需要の見通しで特筆すべきは、中国の重要性が減少してきているということ。今年の輸入は300万トン、または350万トンぐらいになるのではないかと。2007年は400万、2005年は600万。もしかしたら今後、反発も見せるかもしれない。非常に不安定な経済なので、予測を立てづらい国ではあるが、今後の見通しは暗いと見ている人が大勢。2006年を見てみると、輸入量という意味において、中国は韓国を上回ったが、2010年のころには、この現象が逆転する見通し。日本も石油化学からの需要によって、少し伸びが期待される。また、インドや台湾、インドネシアにおいても伸びが期待されている。



○では、LPガスの行方はどうなるのか。中東の問題はタイミングの問題で、プラントはいずれ操業を開始する。また新しい供給が、今年でなくても、必ずや来年には市場に入ってくると見ている。それによって、供給先が必要になってくる。ブタンの販売に関しては、問題ないと見ている。今年、ブタンは、アジア市場において非常に逼迫しており、供給は少なく需要が上回っている。ブタンは、将来的には供給過多にはならないと見ている。ま



たブタンに対しては、石油化学業界からの需要も出ている。しかし、プロパンは状況が異なり、プロパン市場の主要市場は日本や韓国となるが、こういった国々は成熟市場のため今後伸びが期待されていない。従って、プロパンは西に向かい、主な供給先は、アメリカの湾岸地域だろう。プロパンはヨーロッパにも向かうが、ヨーロッパのプロパンを吸収する能力は限定的で、一方でアメリカはより柔軟性に富んでいる。この柔軟性により、アメリカは輸入量を増やしても吸収することができる。

○ SHIPPINGに関しては、1年前は、2008年VLGCにとって良い1年になると見られていた。というのも、さまざまなプロジェクトが、今ごろ、または2008年中に立ち上がると見ていたから。しかし、プロジェクトが延期になっていることから、実際の取引が始まる前に、VLGC市場の供給が始まってしまう。つまり船の方が、供給過多になってしまっているの。既に今年、五つの引き渡しが行われたが、取引量は拡大しておらず下がっている月さえも見られる。新造船の計画を見てみると、2008年は24隻、2009年に22隻、2010年は5隻、2011年は2隻予定されている。新しい受注が入っていないのが、せめてもの救いで、当面は十分な船があるというメッセージが伝わったのだと思う。また、市場が不透明ということから、ここのところ興味深い展開が見られる。例えば、ケープバルカーのマーケットがブームとなっている。新造船の受注が、VLGCを造る代わりにケープバルカーへと変わってきている。受注を転換させているわけだが、それが2008年の引き渡しとなるのでは非現実的な話だと思う。また、VLGCがウッド・チップ・キャリアに転換されるのではないかと話があった。また廃船の話もあるが、船の供給にはさまざまな調整が、今後行われるのではないかと予測している。しかし、少なくとも向こう2年については供給過多の状況が続くと考えている。何をしても、退役をさせても、受注を転換させても、少なくとも向こう2年間は、船においては供給過多の状況が続くと考える。

○市場は現在の厳しい状況からは回復すると見ている。現在、バルチック海運指数(BDI)は27。これは月当たり25万ということに基づいていると思うが、これだけでは運用経費を賄うことができない。そういったことから、今は底の状況。もちろん、年の後半に入って供給が増えてきたら後押しされてくると思うが、船主が待っているのは中東からアメリカにかけてといったより長い SHIPPING トレードです。こういったことは起き始めるとし、これは船主にとって一助となる。しかし、それでも船の数は多過ぎる状況で、この供給過剰の状況は、少なくとも2010年まで続く。

○船の受注ほかのシブサイズでは注文していない。そういったことから、この供給過多の状況は部分的に起きている。中小型船に関してはバランスが取れているが、VLGCの需要が集中し、取引量は受注量に見合っていない。上のグラフでは、取引量の伸びを船の需要に換算した場合、上がってくると思われる。2008年にはそこまで上がっていないが、

2009年、2010年、2011年、2012年にかけて増えていく。

また、イースト・ウエストの取引、これは長期路線だが、中東からアメリカのメキシコ湾岸地域向けのものになる。理論的には、2009年、2010年には、15隻の供給過多になる見込み。船主に対しては、厳しい時期に入るかもしれないが、乗り越えることができれば、LPGガス業界は今後も有望で更なる発展を遂げると思う。ただ、直近は厳しい状況になると見込まれる。

○総括です。まず、供給の拡大で予測していたものは、プロジェクトの遅れもあり、予測よりもゆっくりと起きている。そういったことから、2008年は、大幅なLPGの供給が増えるとは思えないが、供給拡大そのものは今後起きてくる。2009年から2010年、そしてそれ以降について、より活発な市場になると思われるし、取引量も増える。

ブタン、プロパン個別的には、ブタンは供給過多にはならないが、将来的にプロパンは供給過多になる。また、VLGC市場は、厳しい時期に入って、少なくとも2年間はこの状況が続く。

最後に、最も興味深い点かもしれないが、価格面では引き続きCPが支配的。新しい供給が入り始めたらどのようなようになるか、非常に興味深い展開になると思う。CPに置き換わる事はないが、他の価格指標も追加的に採用されるようになると思う。もう1点、私は、東向け、西向けという2段階の価格構造が中東で起きるのではないかと考えている。

やや挑戦的なコメントだったかもしれないが、これでプレゼンテーションを終え、質問を受け付けたい。

## 質疑応答 1

(質問者A) 2008年、2009年にデリバーされる船のサイズについて教えてください。

(シェリー氏) これらはVLGCです。その規模は大体7万8000立米から8万4000立米ぐらいを見えています。今、一番多いのが8万2000立米ですが、7万8000のものもありますし、より大きな8万4000立米のものもあります。

(質問者B) ナイジェリアから来ました。ナイジェリアについての予測はいつごろ立てられたのでしょうか。というのも、実は状況が変わりまして、プラスLNGとOKLNGの立場が逆転しているのです。BCガスがプラスLNGから撤退して、OKLNGの方に行きました。プラスLNG方からは手を引いたのです。ですから、どれぐらい前にこの予測を立てられたのでしょうか。

(シェリー氏) 私は、ちょうど一月前にこれを用意したのですが、私たちの予測はおっしゃっていただいたのと逆だと思っていました。ですので、訂正していただき大変感謝しています。

(質問者C) 二つ意見があります。まず一つ目は、価格についてです。サウジのC Pについて、非常に見通しがしづらとおっしゃっていましたが、サウジのために申し上げますと、C Pは非常に公正なものであると思います。私どもは、コモディティという、そもそも性格的にはリスクなどにさらされる、原油価格の見通しが立てられない不透明な世の中にいるわけです。私たちはビジネスをするに当たってリスクを管理する必要があり、域内の輸入元はリスクを管理しようとしています。ますます金融機関としてC Pのヘッジなどが見られるようになったと思いますし、今後これはもっと使われるべきだと思います。ですから、C Pが高くなるのか低くなるのかといったことではなく、サウジは一生懸命、公正な価格を出すように努力をしていると思います。私たちがコントロールできるのはリスクのみです。

2点目はインドネシアについてです。インドネシアにはインフラがないということでした。そのとおりでと思いますが、過小評価はできないと思います。90年代前半、中国についても同じようなことを言っていました。そういったことから、インドネシアには今後サプライズがあるのではないかと、私は強気に見ています。

(シェリー氏) 決して、サウジの方々がC Pを立てるに当たって公正ではないと言おうとしたわけではありません。市場を反映するようなC Pが出ていると思います。また、ヘッジについて、ヘッジは行われていないと言いたかったわけではありません。現在のシステムでは難しいと言いたかったのです。

インドネシアについては、あなたの点に賛成しますが、ただ、どうでしょうか。中国ではフローティング・ストレージ・プロジェクトがありましたし、それによって、VLGCの供給過多の問題を回避できるのではないのでしょうか。

(質問者D) 2段階価格設定についてお話をされました。なぜこういったことが起きると思うのでしょうか。それと、このメリットは何だと思えますか。

(シェリー氏) 一つのメーカーで必ずや起きると思っているわけではありません。しかし、一部の生産者で西に売っているところは、ベルビュー関連ベースで行うのではないかと思います。東については、もうかなり出来上がった価格メカニズムがあって、これが続くのだと思います。そういったことで、結果として2段階の価格設定になるのではないかと考えています。

(質問者E) 700万トンのプロパンがアメリカに向かうとおっしゃいました。能力面での問題点、例えば、輸入ターミナルとかそういった意味での能力、また石油化学業界の能力で、いずれ問題が出てくるということは予測していますか。あれば教えてください。

(シェリー氏) とても良い質問だと思います。1年余り前であれば、そういったボトルネックがターミナルで出てくるのではないかと見ていました。しかし、今はそうとも思いません。恐らく、受け入れ基地、能力増強、また新しいプロジェクトが議論されているということから、輸入については吸収できると見ています。また、アルジェリアからの従来の輸入分、北海や新規のナイジェリアからの供給分を吸収できると思います。ダウによる拡大、新しく発表されたターミナル、こういったことをもって、受け入れることはできると思います。しかし、国内に入ってから実際使えるかという疑問は残ります。それから、アメリカのリテール業界は日本と似ていますので、かなり冬が寒くなければ、リテール部門は伸びないでしょう。従って、石油化学業界にかかっていると思います。私の友好的なライバルから、石油化学業界に関するプレゼンテーションが行われますので、そのときに彼の意見を聞くこととなりますが、私は、ヨーロッパと異なり、アメリカの石油化学業界は、テキサスに二つのハブがあって、メキシコ湾岸地域にも能力があるということから、フィードストックに対しては極めて柔軟だと見ています。そしてこの柔軟性を使うことになるでしょう。正しい価格ルールがあればの話でもありますが、そういったことから、プロパンが魅力的な価格になっていけば、ほかのフィードストックからの切り替えが行われると思います。また、石油化学業界はアメリカではかなり大きな規模となっていますから、個人的には、かなり石油化学業界が吸収できると思っています。

(質問者F) ドル安の話が出ていますが、これは今後も続くと思いますか。原油高、原油価格はおっしゃったように100ドルを突破しました。コモディティとして買いやすくなっています。2009年、2010年につきましては供給過多になるということでしたが、より安い商品として見られるようになると思いますか。

(シェリー氏) 相対的なことを見なければいけないのです。絶対的な価格ではなくて、相対価格を見る必要があります。石油ガスを作るのは、特に原油に関して、今でも利益率が非常に高くなっています。また、LPガスについてもしかりで、相対的に安いといえるでしょう。というのも、さらに供給が増えるからです。しかし、悲惨な価格水準にはならないと思います。なぜなら、原油価格が高いからです。ドルについては、昨日の新聞では、原油価格は上昇し、ドル安となりました。どうやら最近はそのようなトレンドが濃厚なようです。

しかし、国際的な取引のメカニズムとして、ドルについては心配しています。中国勢は1兆ドルのアメリカの資産、主に財務省証券を持っています。もしも何らかの理由で中国勢

が売ろうという決定をした場合には、いろいろな結果を招くでしょう。ドルは非常に不安定な立場に現在あると思います。